

壇の越遺跡

—発掘調査の成果—



2009

宮城県加美町教育委員会

宮城県北部地方振興事務所

宮城県北部土木事務所

1. はじめに

壇の越遺跡発掘調査は、関係各機関並びに地元地権者の皆様、発掘調査や遺物整理などにあたられた地元の皆様の多大なるご支援・ご協力を頂きながら、平成8年度より進めて参りましたが、ようやく終了することになりました。厚くお礼申し上げます。

13年間の発掘調査によって、さまざまなことが明らかとなり、この遺跡の重要性が高められました。なかでも、道路で碁盤目状に地割りされた街がつくられていたことが明らかとなった時には、古代史の常識を覆す大発見として、壇の越遺跡の名前が一躍全国に知れ渡ったことでした。

このように遺跡の重要性が判明したため、関係各機関や地権者の皆様のご協力により、遺跡の大部分が地下に保存されることになりました。重要な遺跡を将来にわたって子孫に伝えることは現代に生きる私達の使命でもありますので、今後とも益々のご理解とご協力をお願いいたします。

本書は、これまでの発掘調査の成果をわかりやすくまとめたものです。以下、テーマごとに紹介していきます。



外郭築地堀 (P7)



南郭 (P8)



外郭土塁 (P7)



東山官衙遺跡 (P3)



寺院 (P9・10)



水田 (P6)



屋敷 (P5)



外郭築地堀の門



道路交差点 (P4)



南北大路 (P4)



道路交差点の祭祀 (P10)



遺跡内の様子と周辺の遺跡

2. 場所

壇の越遺跡は、宮城県加美郡加美町鳥嶋・鳥屋ヶ崎・谷地森に所在し、大崎平野の西端に位置します。この遺跡は、奥羽山脈から分かれて延びる丘陵群の末端部とその南側を南流する田川の間^{たがわ}に形づくられた河岸段丘上に立地しています。標高は 48～65 m です。

3. ほ場整備事業・県道改良工事と遺跡

この遺跡は、平成7年度から開始されたほ場整備事業と県道改良工事の対象区に含まれました。そこで、平成8年度に、遺跡の正確な範囲と遺構の密度を把握するための発掘調査を行いました。

調査の結果、この遺跡は東西2km、南北1kmの巨大な遺跡であることがわかりました。この調査成果をもとに、遺跡をできるかぎり保存するために、大規模に壊して工事する切土工法から、壊す面積を最小限に抑えた盛土工法に計画変更がなされました。

4. 発掘調査の成果

発掘調査は平成9年度以降継続して行われ、平成20年度までに工事で遺跡が壊される約147,000㎡を調査しました。発見された遺構は、古くは縄文時代から、新しいものでは江戸時代まで、幅広い時代のものがあることがわかりました。なかでも、奈良・平安時代の遺構・遺物の内容が豊富かつ重要であり、遺跡に隣接する東山官衙遺跡・早風遺跡とは、東山官衙遺跡を中枢部とする一連の遺跡であることがわかりました。

1. 奈良・平安時代

当時、宮城県と福島県は陸奥国と呼ばれていました。神亀元(724)年に、律令政府が東北地方の政治・行政・軍事の中心機関として陸奥国府多賀城を設置しました。多賀城が設置された当時、壇の越遺跡がある大崎地方は、律令政府に属さない北の蝦夷社会との境界地帯となっており、情勢は不安定でした。こうしたなかで、律令政府は当地の経営の安定を図るために、政治的・軍事的な拠点をつぎつぎと設置していきました。

このような拠点は、大崎地方に特に多く見られ、東西におよそ3～7km間隔で設置されています。このなかで、東山官衙遺跡も拠点の一つと考えられており、最も西に設置されました。

また、拠点の設置と平行して、天平9(737)年に陸奥国と隣の出羽国を結ぶ連絡路(駅路)の建設が開始され、天平宝字3(759)年によく開通します。



1. 東山官衙遺跡 2. 城生柵跡 3. 名生館官衙遺跡 4. 杉の下・小寺遺跡 5. 南小林遺跡
6. 宮沢遺跡 7. 新田柵跡 8. 伊治城跡 9. 赤井遺跡 10. 桃生城跡 11. 一里塚遺跡

宮城県北域の主な城柵官衙遺跡

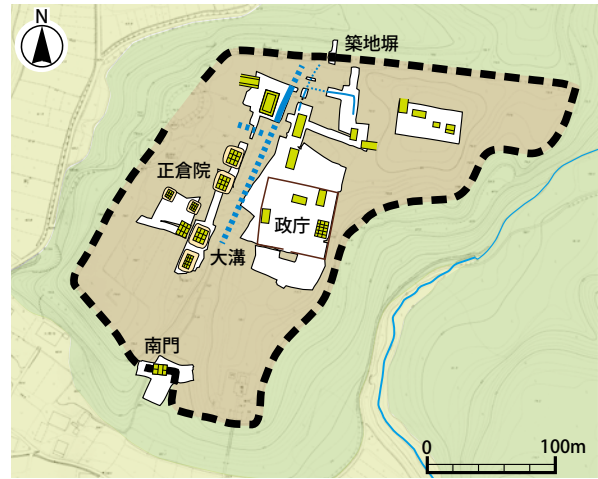
①：東山官衙遺跡（国指定史跡）

壇の越遺跡のすぐ北側、比高差 20 m ほどの高い台地上に東山官衙遺跡があります。東西 300 m、南北 250 m の範囲を築地塀（土をつき固めてつくった塀）で囲み、南辺中央には門が設けられています。内部は上幅 3 m、深さ 1.4 m の南北大溝によって東西に分けられています。

大溝の東側には、東西 54 ～ 60 m、南北 50 ～ 51 m の範囲を塀で区画した政務や儀式を執り行った政庁（せいちょう）があります。政庁の北側には、役人の宿泊施設である館（たて）や、給食施設である厨（くりや）とみられる建物群があります。

大溝の西側には、南北に建ち並ぶ倉庫群と管理施設からなる正倉院（しょうそういん）があります。倉庫は、周囲から焼米が出土していることから米を保管した穀倉と考えられます。

この遺跡は、古代賀美郡域を治める拠点として 8 世紀中頃に設置され、10 世紀前半頃に廃絶するまで、約 200 年間にわたって機能していたと考えられます。



東山官衙遺跡全体図



東山官衙遺跡全景



壇の越遺跡・東山官衙遺跡・早風遺跡全体図

②：壇の越遺跡

a. 街

拠点（東山官衙遺跡）の設置に併せて、拠点の南前面（壇の越遺跡）に、拠点や連絡路建設に関わる役人や兵士、雑用をする人々などが生活するための街がつくられました。街は、ほぼ1町（約109m）間隔につくられた南北・東西の直線道路で碁盤目状に地割りされていて、その範囲は東西1.2km、南北0.8kmにも及びます。

この街づくりは、国府多賀城よりも50年近く早く行われた、全国的にみても古い例のひとつといえます。この地は、陸奥・出羽国間の連絡路建設の陸奥国側の要衝として、政府に特に重要視されたと考えられます。また、北の蝦夷に対して政府の圧倒的な国力を見せ付ける目的もあったのではないかと考えられます。



東山官衙遺跡の南門から南に延びる南北道路で、道路幅は最大で9mと他のもの（3～6m）より広い。



南2東西道路



道路交差点

b. 屋敷

街内からは、掘立柱建物や竪穴住居、井戸、水田など多くの遺構が発見され、たくさんの人々が長い間生活していたことがわかりました。このなかで、材木堀に囲まれた建物群や東西・南北の溝で区画された建物群などが発見され、役人の屋敷と考えられます。



屋敷の主屋 1

南北 8.2 m、東西 5.4 mの南北に長い建物です。建物の周囲には、軒先からの雨水の侵入を防ぐための溝が掘られています。

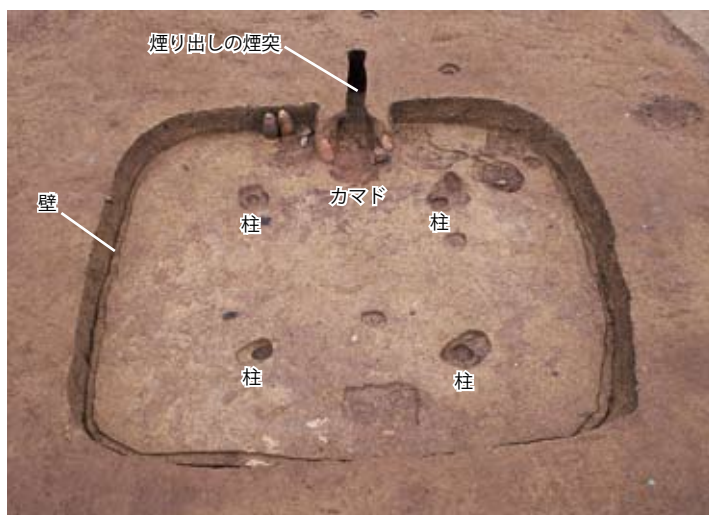


材木堀で囲まれた屋敷

材木堀で南北 66 m、東西 62 mの方形に区画された屋敷が発見されました。屋敷内は、中心的建物の主屋、付属的建物の副屋、倉庫群、給食施設の竈屋、井戸があります。この屋敷の年代は、街がつくられた直後のものと考えられます。

c. 竪穴住居

兵士や雑用をする人々は、農民など当時の一般の人々と同様に竪穴住居に住んでいました。住居は、これまでの調査で約 270 軒が発見されています。住居のほとんどが隅の丸い正方形をしていて、規模は一辺 4 ～ 5 m前後のものが多く見られます。一辺が 5 m以上の中・大型のものとになると、屋根を支えるために 4 本の柱が立てられています。カマドは、ほとんどの住居に付けられています。



竪穴住居



竪穴住居復元図

d. 井戸

井戸は、これまでの調査で約 50 基が発見されています。井戸には、木組みの井戸枠をもつものと、井戸枠をもたない素掘りのものの大きく 2 種類があります。深さはいずれも 1 ～ 2 m ほどです。



木組みの井戸枠をもつ井戸
井戸枠の寸法は、一辺がおよそ 1 m です。



素掘りの井戸
直径は、およそ 1.5 m あります。



井戸の調査風景

e. 水田・畑

水田は、これまでの調査で 3 箇所が発見され、いずれも湿地を利用してつくられています。水田 1 枚の面積はおよそ 110 ～ 170 m²で、幅 1 m の畦畔^{けいはん}で区切られています。

畑は、遺跡のあちこちで発見され、狭いものから広いものまで様々あります。畑の畝^{うね}は、幅が 10 ～ 20 cm、深さが 10 ～ 15 cm あり、1 ～ 1.5 m の間隔で掘り込まれています。



水田



畑

f. 大規模な区画施設

奈良時代後半から平安時代初めにかけて、律令政府と蝦夷勢力の間で長期間にわたる大規模な武力衝突が起きました。とくに、宝亀 11 (780) 年 3 月に勃発した伊治 公 皆麻呂の乱は、陸奥・出羽両国を大混乱に陥れました。双方を結ぶ連絡路沿いにあり、陸奥国側の最前線に位置していた東山・壇の越・早風遺跡は、蝦夷の襲撃に備えなければならなくなりました。

このため、新たに大規模な囲い（外郭）をつくって、街区を囲いの中に取り込み、さらに、東山官衙遺跡の南前面にも街区との境に囲い（南郭）がつくられることになりました。

《外郭施設》

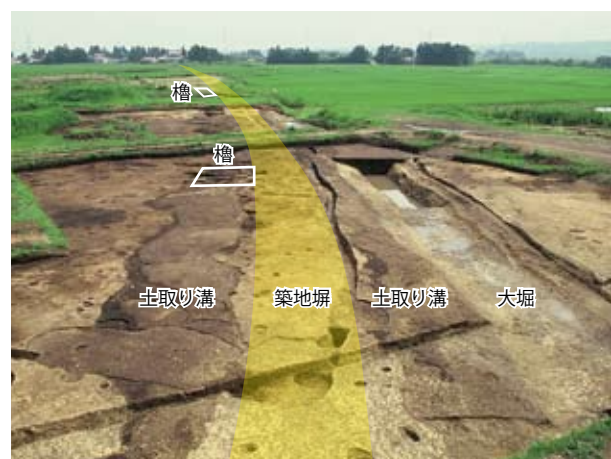
東山・壇の越・早風遺跡を大きく囲む外郭施設は、南西の平野部が築地塀と大堀（平野部でも湿地のところは材木塀）、北から北東部にかけての丘陵部は土塁（土を盛ってつくった塀）と空堀でつくられています。この施設の規模は、東西 1.2km、南北 1.2km と巨大なものです。

築地塀の本体は削られて残っていませんが、塀をつくるために土取りをした溝状の痕跡や、塀の外側に掘られた上幅 5 m の大堀が見つっています。塀の高さは 4 m 近くあったと考えられます。また、塀が完成した後も東西大路で往来できるように門がつくれ、警備のための物見櫓も数箇所につくられています。

土塁は二重につくられていて、間の空堀の底から測ると、土塁の高さは 4.5 m もあります。



外郭築地塀①



外郭築地塀②



外郭土塁と空堀（宮城県多賀城市：東北歴史博物館提供）

《南郭》

外郭施設がつくられたのとはほぼ同じ頃に、東山官衙遺跡の南前面に「U」字形の材木堀と幅3mの大堀からなる囲い（南郭）もつくられました。堀は、南辺が南2東西道路に沿うように東西に伸び、東辺と西辺はそれぞれ東山官衙遺跡を囲む堀の南東隅と南西隅に向けて延びています。また、南北大路で往来できるように門がつくられています。この施設の規模は、南辺が201m、東辺が145m、西辺が228mです。



東山官衙遺跡南前面につくられた南郭



南郭南辺につくられた南北大路の門

門は格式の高い3間1戸の八脚門^{はつきやくもん}です。規模は東西7.2m、南北4.6m、入口の幅は2.4mあります。材木堀は高さ3.5m近くあったと考えられます。



門の柱

柱は直径35cmのクリ材で、長さ1.2mも残っていました。



材木堀の柱

柱は直径25cm前後のクリ材で、長さ50～90cmも残っていました。

g. 寺院

律令政府と蝦夷との抗争が終結してから数十年後、9世紀後葉頃の街の様子をみると、街がつくられた頃に比べ、明らかに人口が減少していることがわかります。

こうしたなかで突如、大型の建物群が出現します。建物群周辺からは、「寺」「上寺」と墨書された土器、五重塔のミニチュアの瓦塔、仏教行事に使用されたとみられる灯明皿など、仏教に関連する遺物がたくさん出土しました。このことから、この建物群は寺院だったと考えられます。

東山官衙遺跡が10世紀前半頃に廃絶すると、この寺院をはじめとする他の建物や住居も後を追うように廃絶し、最終的にこの街は廃墟と化します。



寺院



寺院の大型建物

東西 16.5 m、南北 4.4 mの南北に底が付く東西に長い建物です。壇の越遺跡では最大規模の建物で、東山官衙遺跡の政庁正殿よりはるかに巨大です。



寺院の双堂とみられる建物

正方形の建物と東西に長い建物が、南北に並んで建てられています。寺院の双堂建物と呼ばれる建物の建て方に似ています。



灯明皿

たくさんの灯明をともして仏を供養する仏教行事「万灯会」で使用されたとみられる土器で、油煙が付着しています。穴にまとめて捨てられていました。



瓦塔

寺院の五重塔などを模したミニチュアの土製品です。写真上部が屋根、下部が壁の破片になります。

瓦塔使用の目的については、寺院の^{こんりゅう}建立に際してその予定地に立てておいたという説や、仏堂を建てる代わりに設置して、信仰の対象としたという説などがあります。

宮城県内では、多賀^{たが}城^{しやうはい}廃寺跡、陸奥国分寺跡^{むつこくぶんじあと}で発見例があります。



埼玉県美里町：東山遺跡出土瓦堂・瓦塔

(埼玉県行田市:埼玉県立さきたま史跡の博物館提供)

h. 道路交差点の祭祀

寺院がつくられたのとほぼ同じ頃の祭祀遺構^{さいし}が、道路交差点の3箇所で発見されました。祭祀遺構は、6～7枚の須恵器^{すえきつき}坏を口を上にした状態で重ねて埋納^{まいのう}したものです。こうした道路交差点における祭祀遺構は、平城京^{へいじやうきやう}などの都をはじめ多賀城など古代都市に特徴的にみられるものです。祭祀は、災害や不幸が街に入ってきて来ないように交差点で行われたと考えられます。



道路交差点で発見した祭祀遺構



祭祀遺構検出状況



祭祀遺構出土土器

i. 出土した遺物

遺構から出土した遺物には、土器、土製品、鉄製品、木製品などがあります。奈良・平安時代の土器には、土師器と須恵器の大きく2種類があります。土師器とは、赤褐色や黄褐色の比較的やわらかい焼物です。食器として使われた坏、皿、煮炊きに使われた甕や甗などが出土しました。須恵器とは、窯で1,000℃以上の高温で焼かれた青灰色や灰色の硬い焼物です。坏の他に蓋や、貯蔵用に使われた甕、壺類などが出土しました。

土製品には、魚網のおもりに使う土錘や、糸を紡ぐときにおもりとして使う紡錘車などが出土しました。

鉄製品には、釘、鋸、楔などの建築道具、鍬などの武器、鎌、斧、鋤先などの農工具、刀子（ナイフ）などの文房具、役人が身に付けたベルトの金具などが出土しました。

木製品には、坏、皿、椀、曲物などの食事に使う道具、鋤などの農工具、砧、タタリ台などの織物に使う道具、櫛、建築部材などが出土しました。



屋敷で使用された土器



竪穴住居からまとめて出土した土器



鉄製品



土製品・土錘



木製品

j. 文字資料

出土遺物の中には、文字が書かれたものがあり、墨書土器、ヘラ書き土器、木簡、漆紙文書^{もっかん うるしがみもんじょ}があります。

墨書土器は土器に墨で文字が書かれたもので、100 点ほど出土しました。書かれた内容をみると、施設名、地名、人名などがあり、1 字だけで縁起^{えんぎ}の良い文字も多く見られます。また、記号もあります。

ヘラ書き土器は、焼成前のまだ軟らかい土器に、ヘラで文字を書いたもので、記号が多く見られます。

木簡は、墨書のある木製品で、2 点出土しました。文字を練習した習書木簡と米などの出納関係^{すいとう}のことが書かれたものがあります。

漆紙文書は、役所で不要になった紙（文書）を、漆職人が漆液の乾燥を防ぐための蓋紙として再利用した結果、しみ込んだ漆のおかげで紙が腐らずに残ったものです。漆紙文書の多くは、肉眼では文字を観察することが困難ですが、赤外線テレビカメラに映すと文字を容易に観察できるようになります。調査では4点出土し、祭祀、仏教、布・租米^{そまい}（租税として納める米）等に関わるもの、姓名が書きつらねてあるものがあります。



「大田」とヘラ書きされた土器



墨書土器

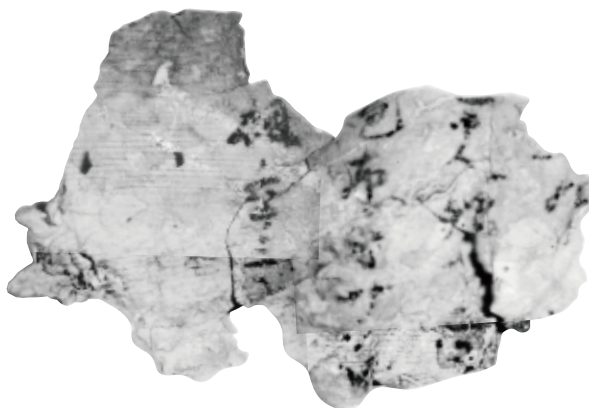


習書木簡

□ 升一升大弟又 □ 三升子弟 □
(給力)



漆紙付着土器出土状況



漆紙文書

赤外線テレビカメラで映し、撮影したもの

出納関係の木簡

II. その他の時代

①：縄文・弥生時代

遺跡のあちこちで、縄文時代の動物を捕まえるための^{おと}陥し穴が発見されました。住居は発見されませんでしたので、この近くに住んでいた人々が、この地を利用して狩りを行っていたようです。

また、弥生土器と稲の収穫に使用された石包丁も出土しました。



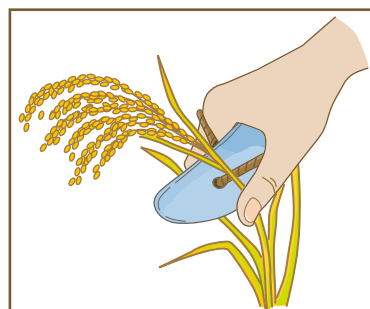
陥し穴

直径1mの円形で、穴の底に杭が据えられていたもの。この他に、長さ3m、幅30cmの細長く、幅がせまい形のものもあります。



石鏃

弓矢の先端につけられた矢じり



石包丁

鉄製の鎌が普及するまでの間、稲穂を摘み取る道具として使用されました。

②：古墳時代

5世紀後半頃から6世紀初め頃にかけての古墳時代中期の^{こふん}竪穴住居が数軒発見され、遺物がたくさん出土しました。また、祭祀に使われたと考えられている石製模造品も出土しました。



竪穴住居から出土した遺物



石製模造品

まがたま 勾玉、鏡、うすだま 白玉を模したものが出土しました。

5. 発掘調査の方法

《野外での調査作業》

はじめに遺構を確認することができる地層の深さまで、重機などを使い掘り下げます。その後、ジョレンで地面をきれいに削り、どのような遺構があるか確認します。

遺構の数や形が確認された後、いよいよ移植ベラなどで遺構を掘り下げていきます。掘り下げた際に遺構から出土する土器などの遺物は、その遺構の年代を決める大事な資料となりますので、慎重に取り上げます。

発見された遺構は、発見場所・形状・つくり方・埋まり方などが明らかにされ、平面図や断面図を作成し、記録します。また、測量作業と平行して遺構の写真撮影も行います。



ジョレンを使った遺構確認作業



竪穴住居の掘削作業

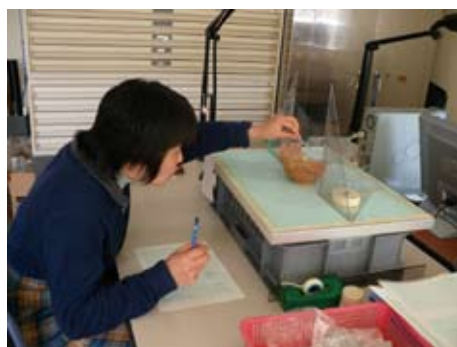
《屋内での整理作業》

野外調査作業が終了した後、調査中に作成した遺構の平面図や断面図、撮影した写真を整理・検討します。また、出土した遺物の整理作業も行い、調査報告書にまとめます。これで、発掘調査が終了となります。



遺物整理作業

洗浄し、乾燥させた遺物に、出土場所を注記し、バラバラの破片を接合・復元します。



遺物の実測作業

遺物の寸法を正確に測り、図を描きます。

6. 現地説明会や発掘体験

発掘調査の成果を一般の方々に公開するために、現地説明会を開催しました。

また、遺跡内に所在する賀美石かみいし小学校の生徒を対象に、発掘体験や現地説明会も行いました。



現地説明会の様子



6年生を対象とした発掘体験

7. おわりに

本書の作成に際しては、以下の機関のご指導・ご協力を頂きました。心よりお礼申し上げます。

埼玉県立さきたま史跡の博物館、東北歴史博物館、宮城県教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所



壇の越遺跡

－発掘調査の成果－

平成 21 年（2009）10 月 20 日発行

編集・発行 加 美 町 教 育 委 員 会
宮城県加美郡加美町宮崎字屋敷 1-52-4
TEL：0229（69）5113

印 刷 有限会社 中 村 印 刷
宮城県加美郡加美町字一本杉 215
TEL：0229（63）2008
